

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第3集

溝池北古墳

1991年3月

倉敷市教育委員会

序

豊かな緑と美しい瀬戸内の海に恵まれた倉敷市は、古くから栄えたところで、市内には数多くの埋蔵文化財の存在が知られています。

しかしながら、近年市内では宅地開発やリゾート開発をはじめとする各種開発事業が大幅に増加しており、それらを取りまく環境は非常にきびしい状況となってきています。こうした中で、文化財をかけがえのない財産として保護し、開発との調和を図っていくことがますます重要な課題となっています。

今回の発掘調査は、民間企業による宅地開発事業に伴って実施されたものです。発掘調査の結果、前庭部を有する横穴式石室が確認されるなど、古墳時代後期における古墳の実態の一部が明らかになりました。

この調査報告書は、これらの調査の成果をまとめたものであります。本書が今後の文化財保護・保存に活用されるとともに、考古学の研究資料として、また郷土の歴史研究の資料として、いささかなりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただきました関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

倉敷市教育委員会

教育長 今田昌男

例 言

1. 本書は、住宅団地造成工事に伴う溝池北古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課職員福本明・鍵谷守秀・小野雅明が担当し、昭和62年10月19日から11月30日まで実施した。
3. 発掘期間中は、株式会社熊谷組をはじめ多くの方々にお世話になった。また工事を担当した水島興発株式会社の方には調査当初から完了まで大変お世話になった。記して感謝の意を表します。
4. 報告書の作成は倉敷市教育委員会が行い、その執筆にあたっては第1章を谷岡孝久、第2章を福本、第3章1・2節を鍵谷が行い、第3章3節・第4章および編集は小野が担当した。
5. 遺物の整理にあたっては、浦邊美紀子・多賀和美・藤井君恵氏の協力を得た。
6. 挿図中に使用した高度値は海拔高であり、方位はすべて磁北である。
7. 第2図の地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1の地図（茶屋町）を複製したものである。
8. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等はすべて倉敷市教育委員会文化課文化財整理室に保管している。

目 次

序 文

例 言

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の経過	4
第3章 発掘調査の概要	5
第1節 墳丘と周溝	5
第2節 横穴式石室	6
第3節 遺物の出土状況	12
第4節 出土遺物	13
第4章 まとめにかえて	16

図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡	2
第3図 墳丘測量図(S = 1/100)	5
第4図 墳丘土層断面図(S = 1/40)	7・8
第5図 横穴式石室実測図(S = 1/40)	9
第6図 石室平面図(S = 1/40)	11
第7図 石列平面・立面図(S = 1/40)	12
第8図 石室内遺物出土状況(S = 1/40)	13
第9図 出土遺物1(S = 1/4)	14

図 版 目 次

- | | | |
|------|--------------------|--------------------|
| 図版 1 | 1. 溝池北古墳遠景(東から) | 2. 伐採後の状況(北から) |
| 図版 2 | 1. 調査作業風景(北から) | 2. 墳丘土の状況(南から) |
| 図版 3 | 1. 東側壁付近の築成状況(南から) | 2. 西側壁付近の築成状況(南から) |
| 図版 4 | 1. 墳丘東土層断面(南から) | 2. 墳丘西土層断面(南から) |
| | 3. 墳丘北土層断面(東から) | |
| 図版 5 | 1. 石室床面遺物出土状況(南から) | 2. 同 上 |
| | 3. 同 上(奥壁付近) | |
| 図版 6 | 1. 石室全景(南から) | 2. 石室内部の状況(南から) |
| 図版 7 | 1. 東側石列の状況(西から) | 2. 西側石列の状況(南東から) |
| 図版 8 | 1. 調査終了後(南から) | 2. 同 上(北から) |
| 図版 9 | 出土遺物 | |

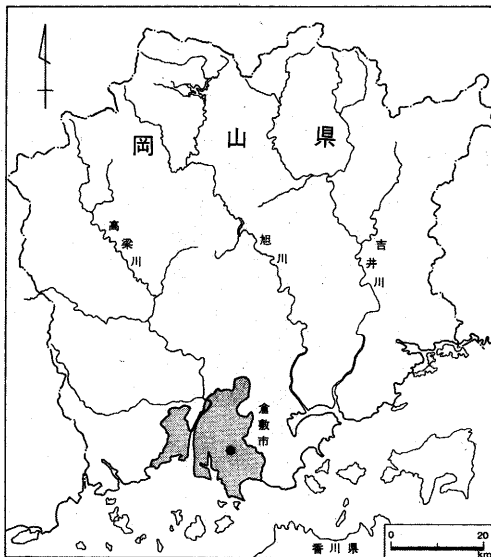
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

溝池北古墳は、倉敷市福田町広江字原奥に所在する。

古墳は、児島半島の北部、銅鐸が出土したことで知られる種松山山塊^{註1}の南端、標高170mの山王山から南へ派生した尾根の先端に位置している。

児島はその名が示すように、かつては瀬戸内海に浮かぶ大きな島であった。古墳の東に広がる郷内盆地は海水が島の奥深くまで入り込み、大きな入江状を呈していた。一方、西の広江の谷あいには瀬戸内海に面した島の西岸であった。これらの地域が現在のような姿になるのは近世になってからである。郷内盆地は近世以降の干拓、郷内川の堆積作用により次第に陸地化していったものである。広江の西方沖合の陸地化は江戸時代後期の干拓によって新田が出現したことに始まり、第二次大戦後の水島臨海工業地帯の埋め立てによる造成によって現在の姿になっている。

古墳の周辺は種松山山塊と鴨ヶ辻山山塊に挟まれて谷状を呈しているが、現在は水島と岡山市を結ぶ県道が東西に走り、また、本州と四国を結ぶ瀬戸中央自動車道の水島インターチェンジが設置されている。これら道路網の整備・発達により、付近一帯は宅地造成や住宅建設が近年盛んに行なわれ、その姿を徐々に変えつつある。



第1図 遺跡の位置

周辺には数多くの遺跡が存在しているが、その多くは山裾の低位部付近、あるいは丘陵上にかけて所在している。広江・浜遺跡は第三福田小学校の建設に伴って1966年（昭和41年）、1978年（昭和53年）に発掘調査が実施され、縄文時代後期から晩期の土器をはじめ、古墳時代後期の師楽式製塩土器などが多数出土している。^{註2}

弥生時代の遺跡は真弓池遺跡、福江前山遺跡、曾原遺跡、竹田貝塚などがある。真弓池遺跡は種松山山頂の南東にある真弓池を中心とした中期後半の集落遺跡で、サヌカイト製の石包丁や石鏃などが採集されている。福江



- | | | | |
|---------------|--------------|------------|---------------|
| 1. 溝池北古墳 | 2. 湾戸遺跡 | 3. 湾戸古墳群 | 4. 三軒屋古墳群 |
| 5. 広江北地西古墳群 | 6. 広江北地東古墳群 | 7. 広江・浜遺跡 | 8. 広江南地古墳群 |
| 9. 広江南古墳 | 10. 真弓池遺跡 | 11. 荒神池古墳 | 12. 新池古墳 |
| 13. 天王山荒神古墳 | 14. 曾原西古墳 | 15. 中出貝塚 | 16. 曾原中世墓群 |
| 17. 曾原西遺跡 | 18. 天満山古墳群 | 19. 福江前山遺跡 | 20. 福江天王池西窯址群 |
| 21. 福江天王池東窯址群 | 22. 正面山寺跡 | 23. 福林湖遺跡 | 24. 熊坂古墳群 |
| 25. 熊坂窯址群 | 26. 熊坂須恵器散布地 | 27. 桧谷窯址 | 28. 福南山遺跡 |
| 29. 向木見遺跡 | 30. 森池遺跡 | 31. 鼻高山城址 | 32. 戸津田遺跡 |
| 33. 戸津田北古墳群 | 34. 戸津田古墳群 | 35. 曾原遺跡 | 36. 大正池遺跡 |
| 37. 園地池遺跡 | 38. 笹間遺跡 | 39. 福岡山北貝塚 | 40. 福岡山遺跡 |
| 41. 新熊野山遺跡 | 42. 竹田貝塚 | 43. 北村大下遺跡 | 44. 木見古墳群 |
| 45. 下木見遺跡 | 46. 諸興寺跡 | 47. 寺内遺跡 | |

第2図 周辺の遺跡

前山遺跡は岡山県南部における中期後半の標式遺跡として著名な遺跡である。^{註3}

古墳時代の遺跡はそのほとんどが後期に属するものである。湾戸遺跡は師楽式製塩土器を出土する海浜集落として知られている。横穴式石室を中心とする後期古墳は湾戸・三軒屋・天満山の各古墳群を中心として30基前後が知られている。また、郷内盆地の熊坂、向木見、福江の丘陵には7世紀前半から8世紀代にかけての須恵器の古窯址群が所在している。しかし、これらの古墳・窯址は宅地造成、土取りなどによってその姿を次第に消しつつある。

平安時代以降の遺跡は郷内盆地周辺に、村落址、寺院址、中世墓、貝塚、山城址などが存在している。なかでも、中世の村落址である曾原西遺跡、天王山中世墓群は瀬戸中央自動車道の建設に伴って1978年（昭和53年）に発掘調査が行なわれている。^{註4} 曾原西遺跡は丘陵上に所在する鎌倉時代から室町時代にかけての村落址で、掘立柱建物址や井戸、備前焼、亀山焼などの播鉢・甕・椀などが出土している。天王山中世墓群は標高55mの天王山山麓に所在している。備前焼の壺、土師質羽釜を利用した骨蔵器、亀山焼の壺を利用したと思われる土壌の他に、木箱に収めて埋葬されたと思われる火葬人骨片が出土しており、岡山県内では例をみないものである。

以上のように、溝池北古墳周辺には縄文時代から歴史時代にかけて数多くの遺跡が存在しており、瀬戸内海に浮かぶ島であったころから児島の北部における中心的な地域であったことが推察される。

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

倉敷市福田町広江地区は、県南重工業の中核である水島コンビナートに隣接した地区で、倉敷市街まで約10km、児島市街まで約7kmという位置にある。このため企業の社宅用地として、また周辺都市のベッドタウンとして早くから注目を浴びており、住宅団地の建設が進められている。

当該古墳を含む一帯についても、昭和40年代末頃に日本鉱業株式会社の社宅用地として開発が計画されたことがあり、倉敷市に事前の協議がなされた。これを受けて倉敷市教育委員会では、昭和49年3月に遺跡確認調査を実施し、当該地区内南端の尾根上に横穴式石室を有する古墳1基の存在が確認された。このため当該古墳を保存するという方向で協議が進められ、古墳の所在する尾根部分を残し、造成工事が進められることとなった。ところが、その後、諸般の

事情により事業は造成工事途中で中止となり、山肌は削平されたまま長期間放置されることとなった。

昭和62年になって、同一敷地内にみのる産業株式会社と瀬戸内企業株式会社の2社によってゴルフ練習場を備えた住宅団地の建設が計画され、改めて倉敷市教育委員会では、前回の開発計画の中で進められていた保存協議の経緯をふまえ、古墳の現状保存を要望した。

しかしながら、古墳の所在する地点は、県道福江福田線に面した好位置にあり、今回の開発計画では、道路沿いの店舗用地として削平されるというものであった。その後、保存協議を重ねる中で、当該地の計画変更は困難で、古墳の現状保存は非常に難しいという結論となった。このため倉敷市教育委員会では、やむなく古墳の全面調査を行うこととし、重要な遺構・遺物が確認された場合には、改めて保存協議を行うということで発掘調査に着手した。

第2節 調査の経過

調査開始時、古墳周辺には雑木が著しく繁茂しており、墳丘の高まりや周溝部分についてもほとんど見通しがきかない状態で、辛うじて石室の一部と確認調査時のトレンチの跡が確認できる程度であった。このためまず、石室を中心に20m四方の範囲の伐採を行い、現地形の測量を行ったのち、10月27日より発掘作業を開始した。

調査は、T字型にあぜを残しながら、まず、表土・流土を除去し、周溝および墳丘の検出を行った。続いて石室内部の調査を行ったところ天井石はほとんど抜き取られており、石室内部もかなり攪乱を受けていることが確認された。しかしながら、石室南端に接して石室の前庭部を画する石列が検出され、比較的良好な状態で確認することができた。

発掘作業は、11月28日まで実施し、11月30日発掘機材の撤収をもって調査は終了した。

日誌抄

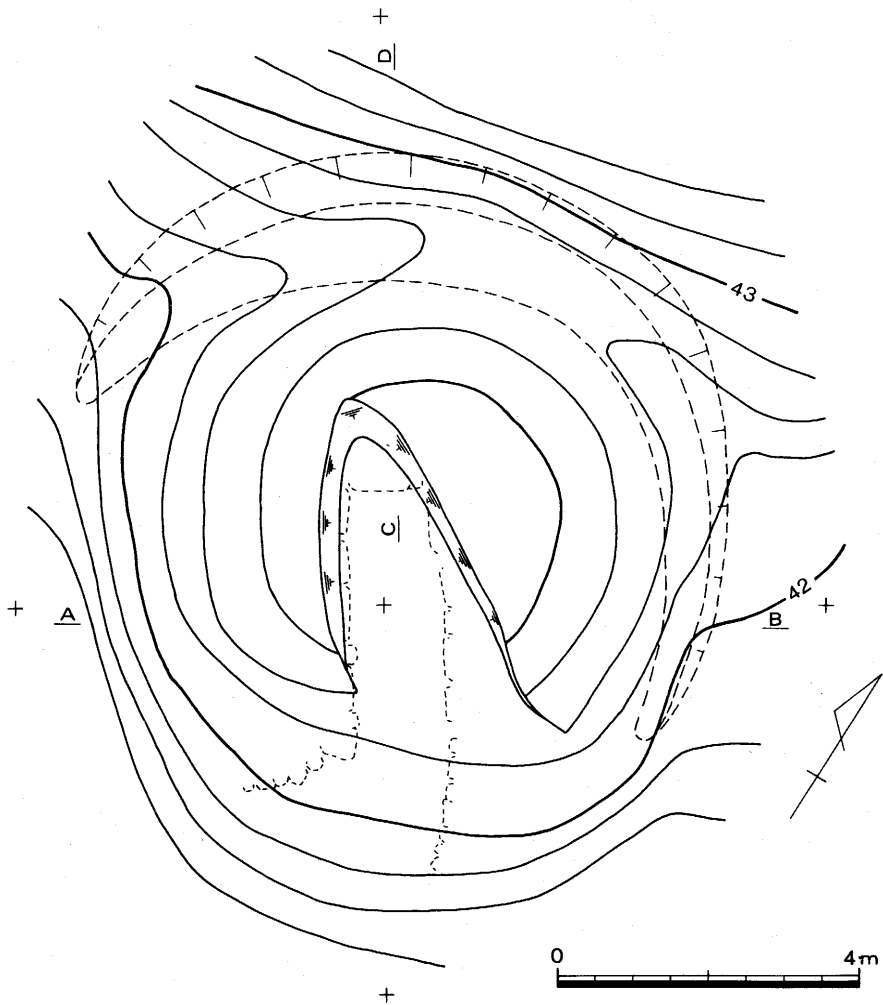
1987年(昭和62年)

- | | | | |
|-----------|--------------------------|------------------|-------------------------|
| 10月19日(月) | 古墳周辺の樹木伐採開始。 | 11月9日(月) | 石室掘り方上面精査。石室内転落の天井石を除去。 |
| 10月20日(火) | 樹木伐採完了。 | 11月10日(火) | 石室埋土除去作業続き。 |
| 10月21日(水) | 調査前の地形写真撮影、地形測量開始。 | 11月11日(水)~17日(火) | 石室内精査。石室内遺物出土状態写真撮影・実測。 |
| 10月22日(木) | 地形測量完了。調査区設定。 | 11月18日(水) | 石室全景写真撮影。 |
| 10月23日(金) | 発掘調査機材搬入。 | 11月19日(木)~20日(金) | 石室および墳丘断面図実測。 |
| 10月27日(火) | 表土除去作業。表土中より須恵器甕片・甍片等出土。 | 11月24日(火)~25日(水) | 石室掘り方埋土除去。 |
| 10月28日(水) | 墳丘流土除去作業・石室内埋土除去作業開始。 | 11月26日(木) | 墳丘断面観察用アゼ撤去。石室全景写真撮影。 |
| 10月29日(木) | 周溝内埋土除去作業開始。 | 11月28日(土) | 石室実測等の補足作業。発掘調査作業完了。 |
| 10月30日(金) | 周溝検出。周溝底面より須恵器甕片・横瓶片等出土。 | 11月30日(月) | 発掘調査機材撤収。 |
| 11月2日(月) | 墳丘地形測量。 | | |
| 11月5日(木) | 墳丘全景写真撮影。 | | |
| 11月6日(金) | 墳丘盛土除去作業。石室前庭部精査、石列検出。 | | |

第3章 発掘調査の概要

第1節 墳丘と周溝

古墳は、標高約43mの南北方向に派生した尾根のほぼ先端に位置している。より細かく見れば、実際の尾根筋からはやや西へずれているため、北東に高く南西に低い丘陵の緩斜面につくられていることになる。墳頂部には以前のトレンチ調査による掘り込みが認められたものの、



第3図 墳丘測量図(S=1/100)

他の部分については地形的に大きな変化を受けたと思われる部分はほとんどなく、墳丘及び周溝は比較的良好な状態で残存していた。

石室長軸方向及び直交方向の断面観察によれば、古墳造営時の地表面と思われる淡黒灰色の層が石室西側で確認されている。一方、石室東側及び奥壁側である北側では認められなかった。これらのことから、地形の高い東側と北側については若干旧地表面を削平したのちに盛土を行い、地形の低い西側の部分については旧地表面の上にそのまま墳丘を構築したことが考えられる。

墳丘上には、主として黄灰色系の土が20～30cmの厚みで数層認められ、全体としてそれほど叩きしめた感じではなかった。これらの土層は、石室掘り方肩部に近い部分はほぼ水平で、墳頂部に近づくにつれ傾斜をもつようになっており、墳形を整えながら盛土を行っていったものと思われる。

地山を浅く皿状に掘り下げた周溝は、背後の北東側を中心にほぼ半弧状に廻っていた。最大幅約2m・最大深さ約40cmを測り、北西及び南東側にいくにつれ幅・深さを減じ、最後は自然地形と一体となる形で終わっていた。

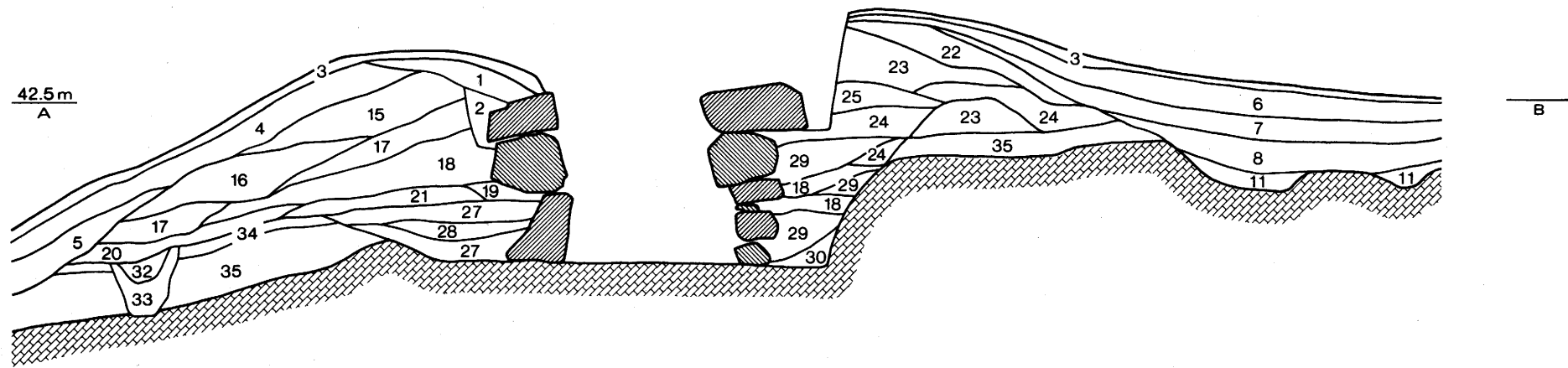
今回の調査では、墳丘断面の観察及び周溝の位置等から、墳裾の確認を行うことができた。まず墳丘東西の大きさであるが、側壁内側から墳端までの長さは東側で約3.2m、西側で約3mを測るので、石室幅を約1.1mとすると合計7.3mという数値を得ることができる。また墳丘南北の長さについては、奥壁内側から墳端までは約2.8m、東側壁の石列を含めた全長は5.3mを測るので合わせて約8.1mということになる。したがって、本墳は石室長軸方向に若干長い径7～8mの円墳ということができる。

墳丘高については、先述したように墳頂部にトレンチ跡があり正確な数値を述べることはできない。しかしながら、現存する側壁の高さが本来の高さであると仮定するならば、推定墳頂部は現状の墳丘斜面の傾斜と合うと思われ、この場合墳丘高は石室床面から約2m、最も低い東側周溝底面からは約1.6mを測る。

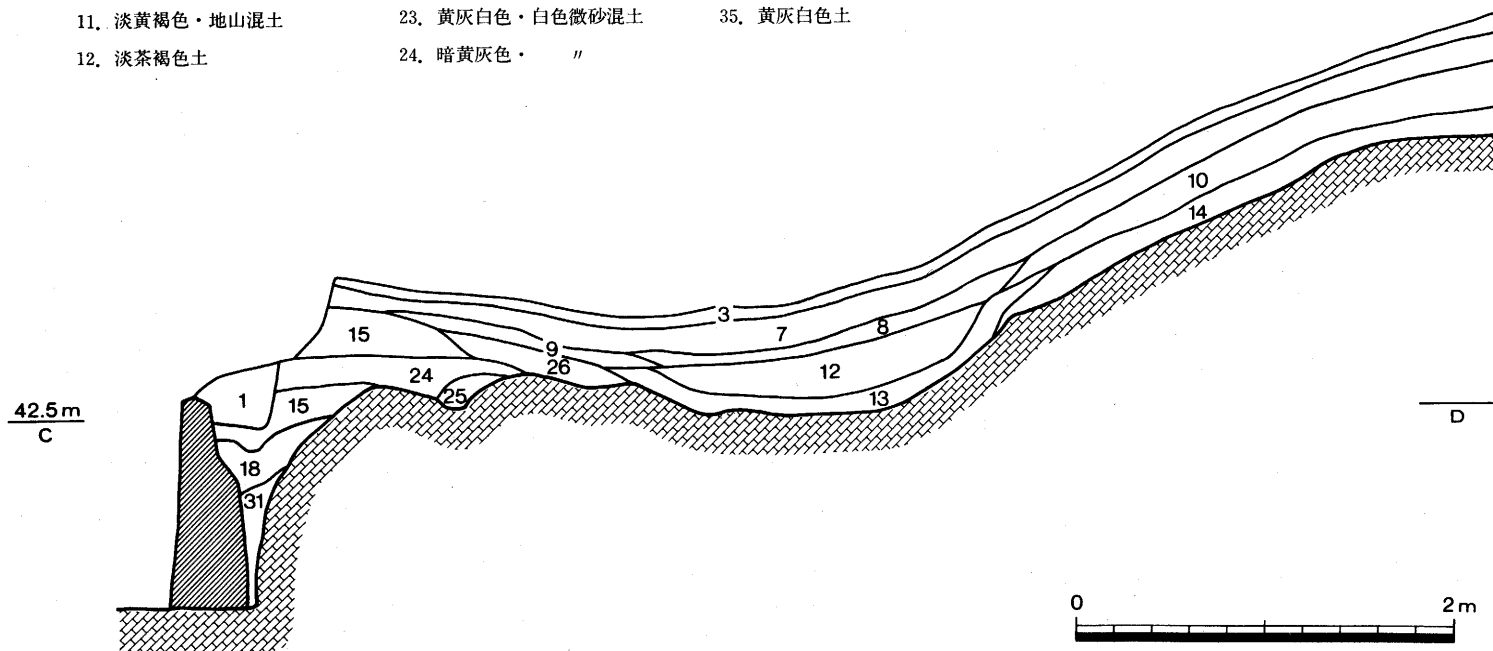
第2節 横穴式石室

本古墳の内部構造は、ほぼ南東方向に開口する横穴式石室で、その主軸方向はN32°Wを示す。天井石は石室入口付近で2枚確認したものの、いずれも石室内へずれ落ちた状態であり、元の位置をとどめたものではなかった。他の天井石は前回のトレンチ調査においても確認されておらず、昭和49年以前にすでに抜き取られていたものと思われる。

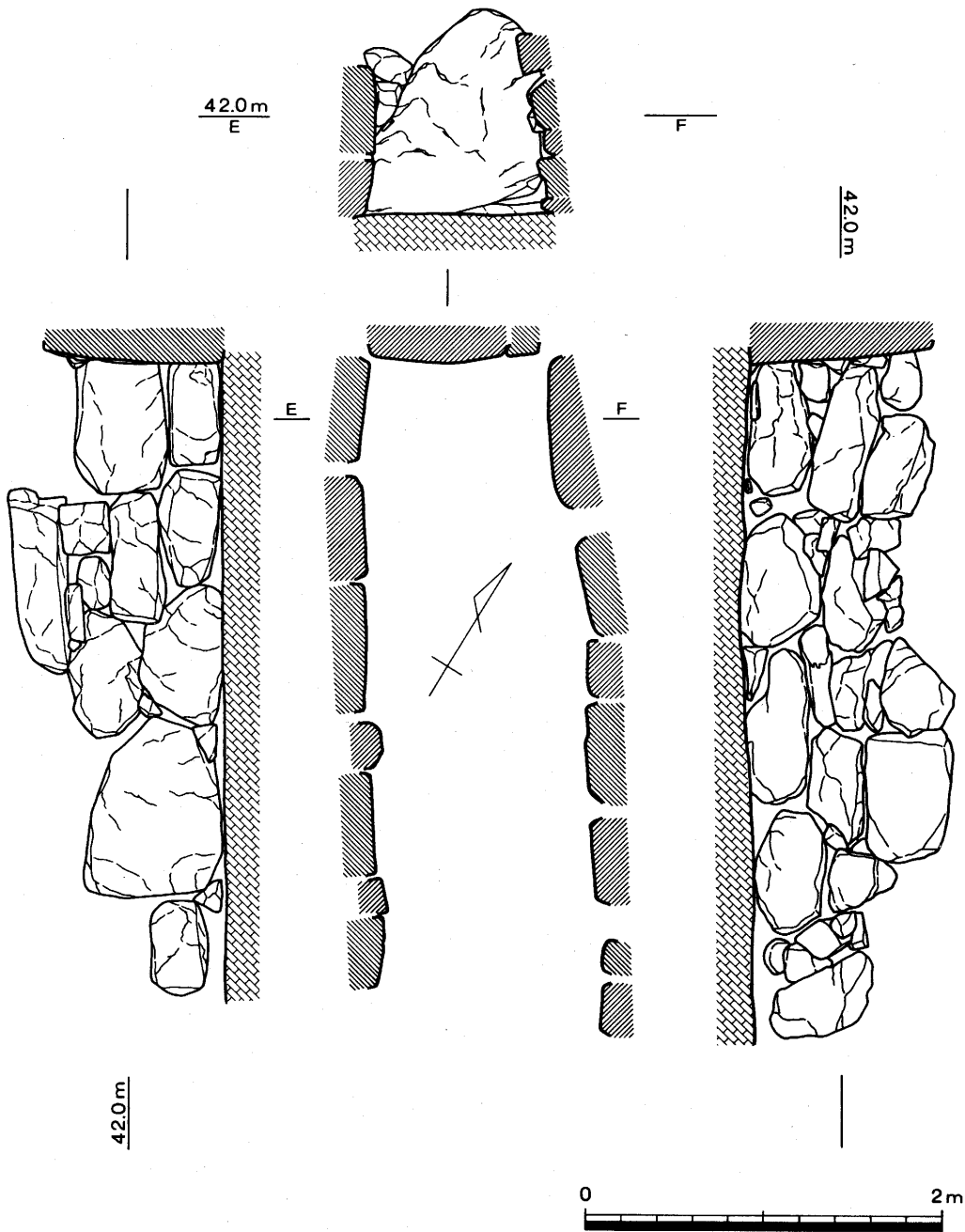
石室は無袖の横穴式石室で、石室床面での全長は、東側壁で3.8m、西側壁で3.6mを測る。西側壁が石室主軸とほぼ平行であるのに対し、東側壁は入口に向かって若干開いている。そ



- | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|
| 1. 前回トレンチ埋土 | 13. 暗黄褐色土 | 25. 淡黄灰色・白色微砂混土 |
| 2. " | 14. 暗灰褐色土 | 26. 暗黄灰褐色土 |
| 3. 淡黑灰色腐植土(表土) | 15. 淡黄灰色土 | 27. 暗黄褐色土 |
| 4. 淡黄灰色・淡黑灰色混土 | 16. 黄灰白色硬質土 | 28. 淡黄褐色土 |
| 5. 暗黄灰色土 | 17. 暗黄灰白色土 | 29. 暗茶灰色土 |
| 6. 暗黄白色土 | 18. 黄灰色・淡黑灰色混土 | 30. 暗灰色土 |
| 7. 淡黄灰色土 | 19. 暗黄灰色土 | 31. 淡灰色土 |
| 8. 暗黄灰色土 | 20. 淡黄灰色・灰白色混土 | 32. 淡黑灰色土 |
| 9. 黄灰色土 | 21. 黄褐色土 | 33. 淡茶灰色土 |
| 10. 淡黄灰褐色土 | 22. 黄灰白色土 | 34. 淡黑灰色土(旧表土) |
| 11. 淡黄褐色・地山混土 | 23. 黄灰白色・白色微砂混土 | 35. 黄灰白色土 |
| 12. 淡茶褐色土 | 24. 暗黄灰色・" | |



第4図 墳丘土層断面図(S=1/40)



第5図 横穴式石室実測図(S=1/40)

のため、石室幅は奥壁付近で1 m、入口付近で1.2 mを測り、入口部分が20cm程度広くなっている。石室の高さについては、天井石が全く残っていなかったため明らかではない。しかしながら、奥壁が偏平な1枚岩でそれ以上石材を積むことが困難であること、また現存する両側壁の最も高い部分が奥壁のそれとほぼ同じ高さであることから、石室の上端面はそれらの高さで揃えられていた可能性が高い。この場合、石室の高さは約1.2 mを測ることになる。

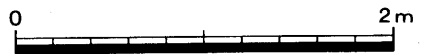
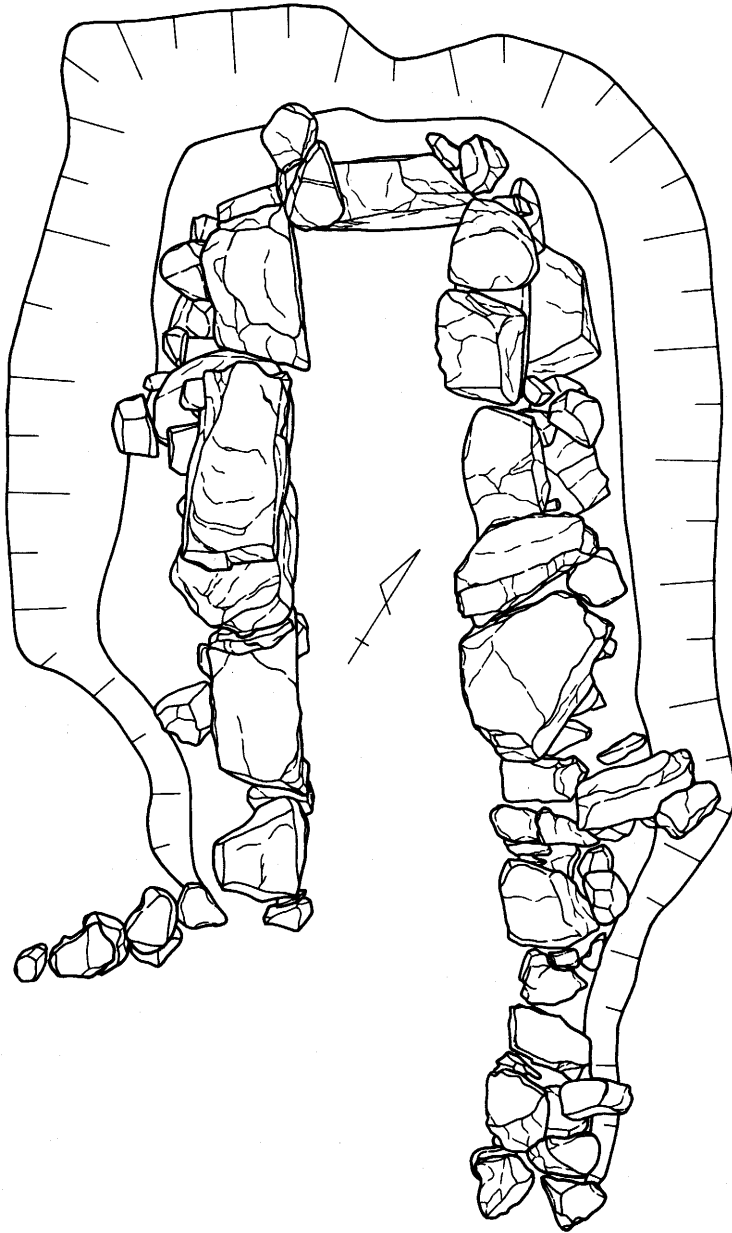
奥壁には高さ1.2 m・幅1.1 m・厚さ40cm程の偏平な1枚岩を用いている。両側壁との間にできた空間部には、小さな石を埋め込み、そのすき間を埋めていたと思われるが、現状では両側壁とほぼ同じ高さまでの2個が認められるにすぎない。

側壁は、3段積みの部分もあれば、小さめの石材を数段重ねている部分もあり、全体としてその積み方に規則性はないようである。ただし、1段目の石材に関しては、両側壁とも奥壁から4個目までは大きめのものを用いているのに対し、それより先の石室入口付近には小さめの石材を使用している。西側壁がほぼ垂直に積まれているのに対し、東側壁は持ち送り気味に内傾しているが、側壁の広がりから考えて天井石消失に伴い土圧により内側へせり出したものと思われる。

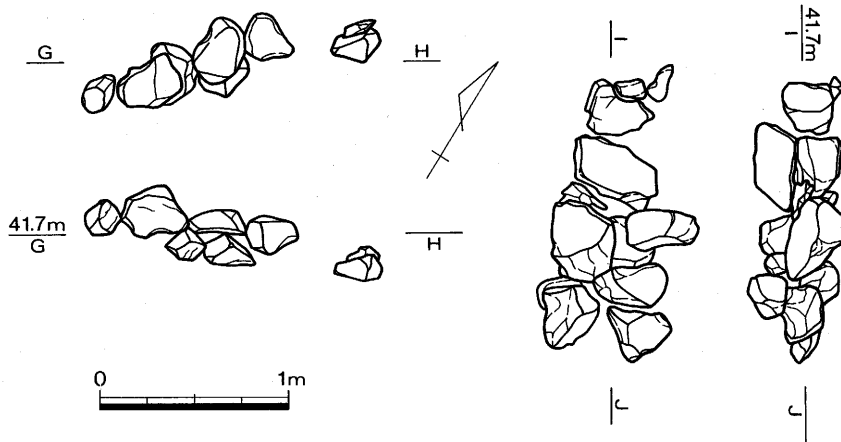
石室入口で両側壁から続く石列を検出した。西側の石列は人頭大の石を1段ないしは2段1列に積んでおり、その長さは約1.6 mを測る。石列を構築する際、その上面の高さをほぼ水平に保つため、地山が低くなる西側の部分については20cm程度の置土をしている。長さ約1.4 mを測る東石列は、西側のものより幾分大きめの石を用いている。基本的には2段2列で積まれているものの、部分的には1段あるいは1列のところもある。西側と同様、地形の低くなる南側の部分には、置土あるいは使用する石材の大きさを変えることで石列の上面がほぼ水平になるようにしている。

西側石列は側壁に対して約70°外側に折れており、一方東側のそれは約10°内側に折れている。したがって、石室の前面にはほぼ長方形の広い空間ができることになるが、この部分からは何らの遺構も検出されず、また遺物の集中等もみられなかった。

石室は、幅3.8 m、長さ約6.2 mを測る隅丸長方形の墓壇を掘りくぼめた後、ほぼその中央に構築されていた。古墳築造前の地形は北東に高く南西に低いため、墓壇は北東に深く南西に浅い掘り方となっており、奥壁付近で1.2 m、東西両側壁中央部の背後でそれぞれ70cmと30cmを測る。石室掘り方は、東側壁側では南端部である石列の先端付近まで認められるのに対し、西側では石列と側壁の境界付近で終わっており、石列の先端までには及んでいなかった。なお、墓壇の底面はそのまま石室の床面となっており、排水溝等の施設は認められなかった。



第6回 石室平面图(S=1/40)



第7図 石列平面・立面図(S=1/40)

第3節 遺物の出土状況

今回の調査で出土した遺物としては須恵器杯蓋、高杯、甗、壺、横瓶、甕等と器種不明の土師器が少量ある。総量は整理用コンテナ1箱分と少なく、全て小破片の状態で出土しており、完形に復元できるのは須恵器甕1個体にとどまる。

石室床面からの出土遺物は少なく、須恵器甕等が小破片で出土した程度である。須恵器甕の破片は石室全体に散乱した状態で検出され、また石室前面の東西石列によって画された空間(以下「石室前庭部」と呼ぶことにする)にも及んでいた。接合した結果1個体がほぼ完形に復元され(第10図の8、以下数字は第9図～10図の遺物番号)、少なくとも2個体は認められる。

なお、石室床面には花崗岩の板石が検出されており、これが棺台として使用された可能性がある。しかし、精査したにもかかわらず鉄釘等は検出されておらず木棺の痕跡も確認されていない。

石室埋土中からは須恵器杯蓋、横瓶が出土している。横瓶については石室前庭部の埋土中や周溝内から多くの破片が出土しており、接合の状況からみて同一個体の可能性が高いと思われる。このこととあわせて、後述する周溝内からの遺物の出土量が石室内からの出土量を上まわることから石室内は攪乱を受け、副葬品の多くは石室の外へ放出されたのであろう。

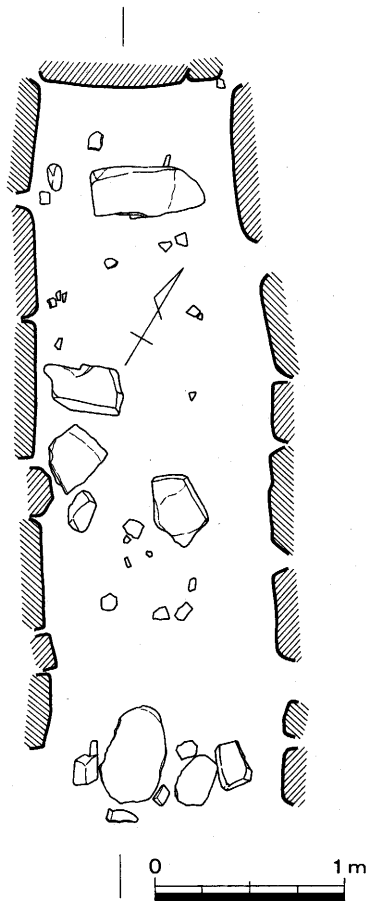
石室前庭部の床面からは先述の須恵器甕の他少量の土師器が出土し、その埋土中からは須恵器杯蓋、高杯、横瓶等が検出された。

周溝内からは須恵器壺(4)、高杯(2)、横瓶、甕(9、10、11)等が出土しており、出土

総量は最も多い。かなり離れた地点で検出されたものが接合する例があり、他の場所と同様保存状態は良くない。

その他、調査地点では以前にヤマモモなどを植樹していたらしく、植木を掘りおこした跡と思われる土壌中から須恵器甕（3）が検出された。また、表土直下から須恵器杯蓋（1）が出土している。近辺には当該期の遺跡は認められておらずこれらの遺物は当古墳に関するものと考えられる。

以上述べたとおり、今回の調査で出土した遺物については原位置を保っていたものは皆無である。しかも全て小破片で出土しており、接合する割合が低く保存状態は悪いといえる。このことは、石室内部は大規模な攪乱を受け、副葬品の多くが散逸した状態を示していると思われる。



第8図 石室内遺物出土状況(S=1/40)

第4節 出土遺物

前節のとおり、出土遺物には須恵器・土師器等がある。全てが小破片で検出されたため図示できるものは須恵器11点にとどまる。

杯蓋（1）

1は全体の1/2が残存する。口径14.5cm、器高2.8cmに復元できる。天井部中央に径2.7cmの擬宝珠様のつまみが貼り付けられている。口縁端部は下方へ短く折り曲げられ、断面が逆三角形を呈する。外面の調整は、口縁部付近がナデ、それ以外は回転ヘラケズリであるが、つまみ付近では調整痕がナデ消されている。内面の調整はヨコナデ。焼成は良好で灰色を呈する。

高杯（2）

杯部の1/3が残る。復元口径は9cm。口縁部はわずかに外反し、杯部高のほぼ1/2の位置位に1本の沈線がめぐる。調整は底部外面が回転ヘラケズリ、他は丁寧なヨコナデである。焼成は堅

緻で、破断面を観察すると表面は青灰色の薄い層、内部は茶褐色を呈する。

甕 (3)

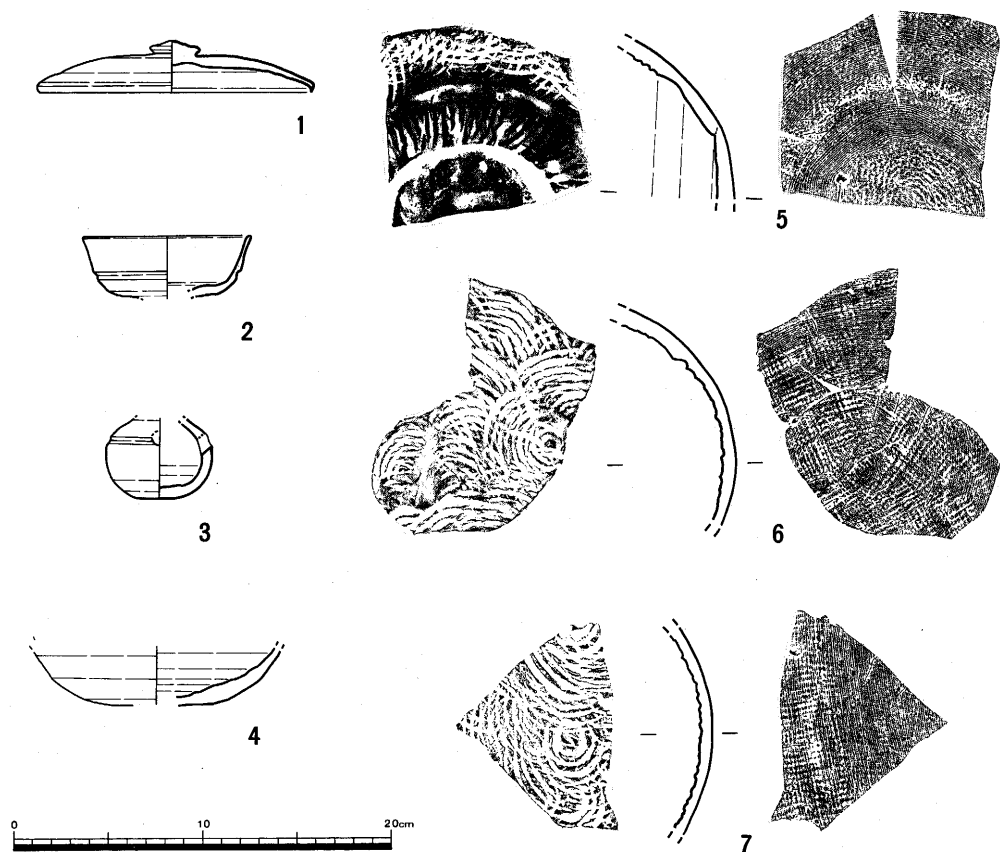
体部の2/3が残る。最大径5.7cm, 体部の器高4.3cm程度の小型品である。体部の中央よりやや上位に径8mm程度の円孔が開けられており、この位置で一本の鈍い沈線がめぐる。内面の調整はヨコナデ、外面は通常の大きさのものと同様、沈線を境にして上位がヨコナデ、下位がヘラケズリである。焼成は良好で表面は暗灰色、内部は赤茶色を呈する。

壺 (4)

4は壺の底部と思われる破片である。外面の調整は回転ヘラケズリ、内面はヨコナデで、丁寧に仕上げられている。焼成は良好で全体的に青灰色を呈する。

横瓶 (5~7)

5~7は同一個体の可能性が高く、後述の特徴から横瓶と判断した。6, 7の外面には擬格子と呼ばれるタタキ痕が顕著にみられるが、3点ともタタキののちカキ目が施されている。5

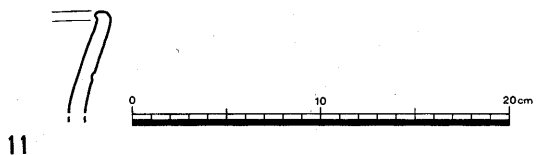
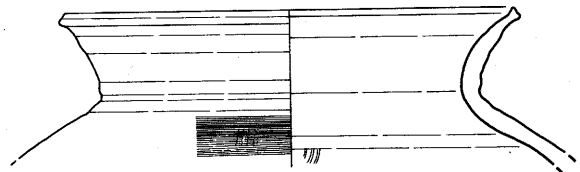
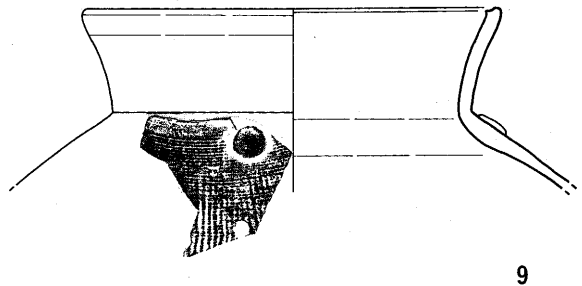
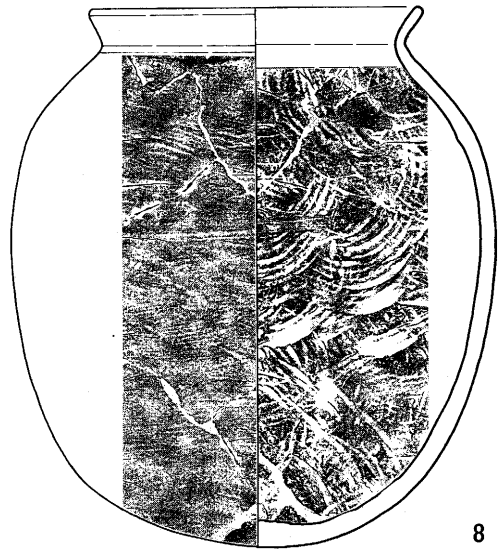


第9図 出土遺物1 (S=1/4)

・6のカキ目は同心円状となっていて、横長の球形の両先端部分にあたり、7はカキ目の状況からすれば側面部分にあたると思われる。内面にはいずれも同心円状のタタキが施されている。5の内面には径約8cmの円孔を粘土板で閉鎖した跡がみられる。円孔の周囲には円弧状のタタキが一周しており、同心円状のタタキとの間は強くナデられている。この円孔は胴部成形の時に上側となった部分であり、下側から順々に成形していったあと最後に残った円孔を外側から粘土板で密閉したのであろう。焼成は良好で全体に青灰色を呈する。

甕 (8~11)

8はほぼ完形に復元された。口径17.6cm、器高28.6cm、胴部最大径は器高の1/2よりやや上位で25.7cmを測る。肩部の張りは弱く、底部の形は球状を呈し、胴部全体の器形は丸みを帯びた卵形に近い。口縁部は短く「く」の字状に開いているが、胴部との境は鈍い感じを受ける。口縁部の器厚はほぼ一定で、端部は丸くおさまる。調整は、口縁部は内外ともヨコナデである。胴部内面には円弧状のタタキを施し、外面はおそらく平行タタキを施したのちにヨコナデによ



第10図 出土遺物2 (S=1/4)

り、ナデ消したのであろう。なお肩部にはかすかに円弧状のタタキ痕が認められる。口縁部に多少焼け歪みがあるが、焼成は良く、青灰色を呈する。

9～11はいずれも小片である。9、10は肩部から口縁部にかけて「く」字状に外反している。9の口縁端の形状は上端を丸くおさめ、その内側にかえり状の突起が一巡するものである。肩部には径1.9cmの円形浮文があり、外面の調整は平行タタキのちカキ目としている。焼成は堅緻で外表面は自然釉により暗緑色、内表面は青灰色で、内部は茶褐色を呈する。10は口縁端部に凹状の面をもつ。口縁部の調整は内外面とも丁寧なヨコナデ、肩部は平行タタキのちカキ目。焼成は甘く、全体が黄灰色である。11は口縁端部に面をもたせて内側に肥厚させており、外面には一条の平行沈線が認められる。焼成は良好で表面は青灰色、内部は淡赤紫色を呈する。

第4章 まとめにかえて

溝池北古墳は住宅団地造成工事にともない、昭和62年10月19日から11月30日にかけて発掘調査が行われた。その概要については第3章で述べたとおりであるが、本章では調査成果に基づき、いくつかの点について触れることにする。

横穴式石室について

本古墳の横穴式石室は無袖の形式で、床面を基準にすると、全長は東側壁で3.8 m、西側壁で3.6 mを測り、幅は奥壁付近で1.0 m、高さは天井石が残っていなかったため不明であるが、1.2 m程度と推定される。石室の長さが東西で異なるのは、両側壁から連続して石室の前面に石列が築かれているためであり、これが本古墳の注目される特徴となっている。

この石列は、側壁で用いられる石材よりも小型のもので構築されており、側壁とは明確な区別が認められる。東側の石列は基本的に2列2段の石材で構成されており、側壁からほぼ直線的に延びている。一方、西側の石列は1列で構成されており、大小の石材を積み重ね、または置き土を行いながら高さを調整している。以上の構造から言及するならば、東側の石列は石室の羨道部的な形状で西側の石列は外護列石的な形状であるといえる。このような形状をもつ石室の類例で明確なものを見い出せないが、敢えて管見すれば総社市緑山17号墳^{註5}があげられる。同古墳は6世紀末～7世紀初頭に営まれたと推定され、奥壁に向かって右側に袖をもつ横穴式石室を内部主体とする。石室の全長は9.8 m、玄室長は6.2 m、幅は奥壁で1.4 mを測る。玄室から続く羨道部は玄室に比べてやや小さい石材を2～3段積み重ねて築かれており、注目されるのはこの部分の右側壁が直線的に延びているのに対し、左側壁の先端が基底部より低く、わずかだが外側に折れ曲っている点である。

石室の形態は両者で大きく異なるが、共通点を1つあげれば石室中心軸の方向と地形の傾斜の方向との関係が類似しており、両石室の「側壁の先端部」が折れ曲がって延びる方向は地形の傾斜の方向とほぼ一致していることである。そこで、溝池北古墳における地形的条件に即して推察すると、石室の前面の空間に注目した場合、地形の低い側の「側壁」を傾斜に沿うよう外側に折り曲げることによって有効な空間をつくりだすことができるであろう。つまり、地形的条件にあわせながら石室前面部を意識して構築されたためにこのような形状を呈するのではなかろうか。類例を待ちたい。

古墳の年代

今回の調査で出土した遺物は少なく、古墳の年代観を論ずる資料は乏しいと言わなくてはならないが、他の調査例から推定してその築造年代は、6世紀後半から7世紀初め頃としてとらえられよう。

出土遺物の中でより古い時期に属すると思われるものは高杯(2)で、蓋杯の形態が逆転する段階の時期にあたる7世紀初め頃に比定できるであろう。

また、表土直下から出土した杯蓋(2)については寒風^{註6}3式の特徴をもつことから7世紀後半に比定できる。石室床面から出土した甕(8)や周溝内から出土した甕(9, 10, 11)もこの時期に近いものと思われる。

以上、少ない出土遺物から本古墳の年代を推定すると溝池北古墳は6世紀後半から7世紀初め頃に築造され、7世紀後半に追葬が行われたと考えられる。

註

1. 梅原末治「岡山県下発見の銅鐸」『吉備考古』83号 1952年
2. 間壁忠彦・間壁菫子「倉敷市広江・浜遺跡調査概報」『倉敷考古館研究集報』第2号 1966年
間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司・小野一臣『広江・浜遺跡』倉敷市教育委員会 1979年
3. 鎌木義昌「岡山県郷内村前山の弥生式遺跡」『吉備考古』80号 1950年
鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成・資料編』1958年
4. 伊藤晃・山磨康平・福田正継「曾原・琴海1号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36』岡山県教育委員会 1980年
5. 「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告1』総社市教育委員会 1988年
6. 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年
7. 山磨康平・西村康「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27』岡山県教育委員会 1978年



1. 溝池北古墳遠景（東から）



2. 伐採後の状況（北から）

図版 2



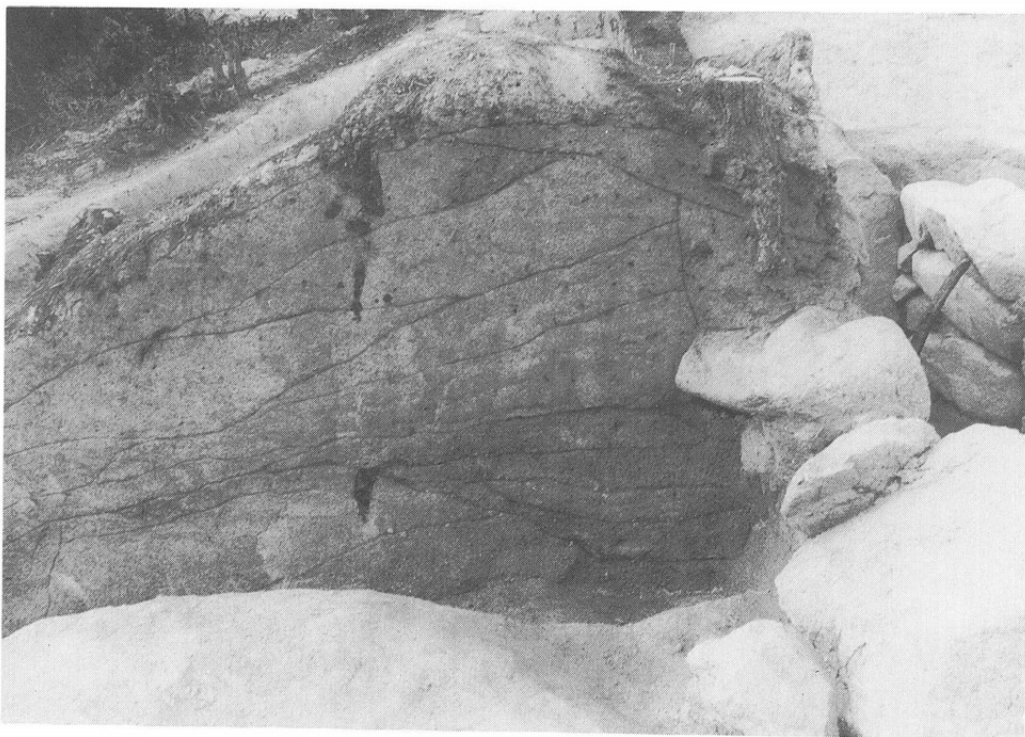
1. 調査作業風景（北から）



2. 墳丘土の状況（南から）

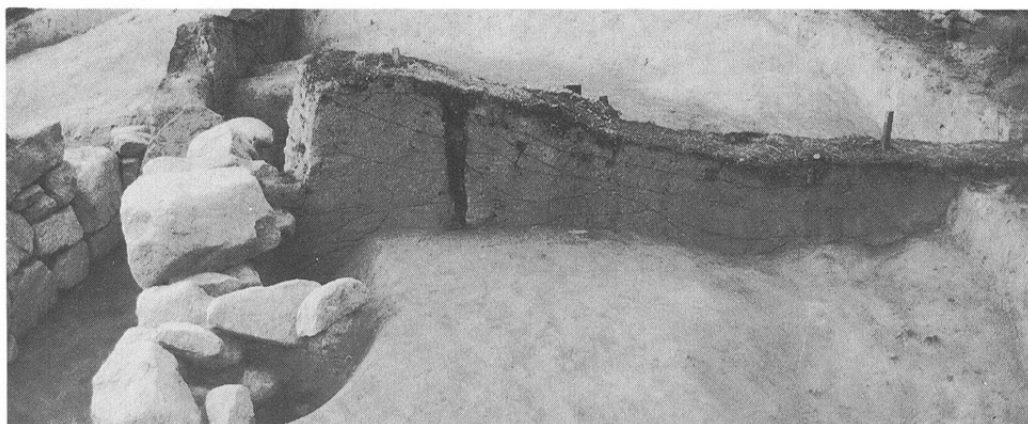


1. 東側壁付近の築成状況（南から）



2. 西側壁付近の築成状況（南から）

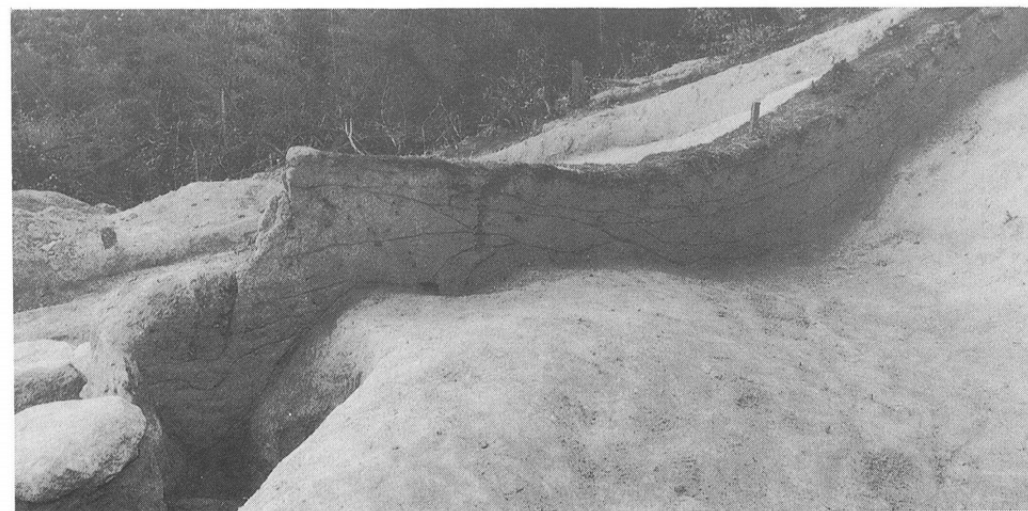
図版 4



1. 墳丘東土層断面（南から）



2. 墳丘西土層断面（南から）



3. 墳丘北土層断面（東から）



1. 石室床面遺物出土状況（南から）

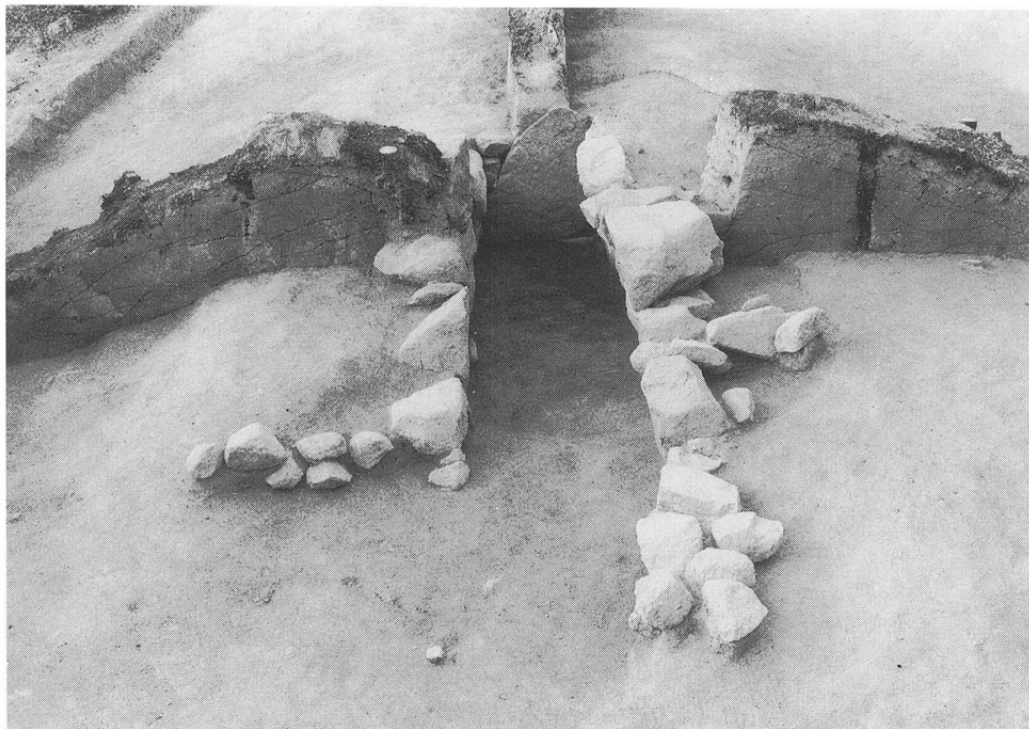


2. 同上



3. 同上（奥壁付近）

図版 6



1. 石室全景（南から）



2. 石室内部の状況（南から）

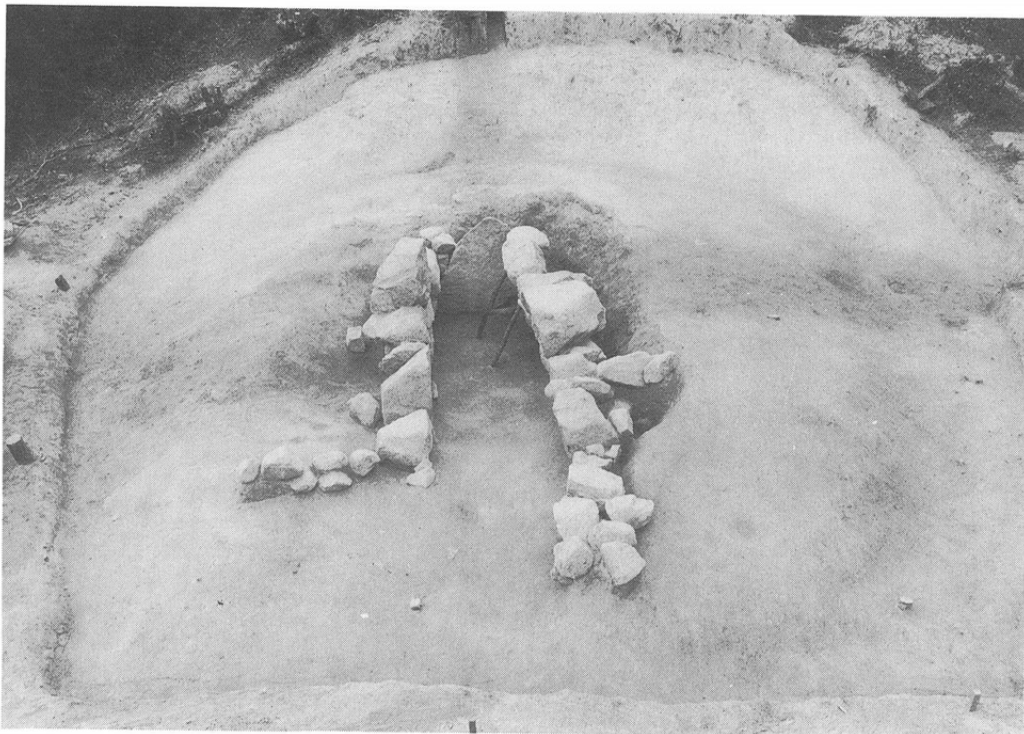


1. 東側石列の状況（西から）

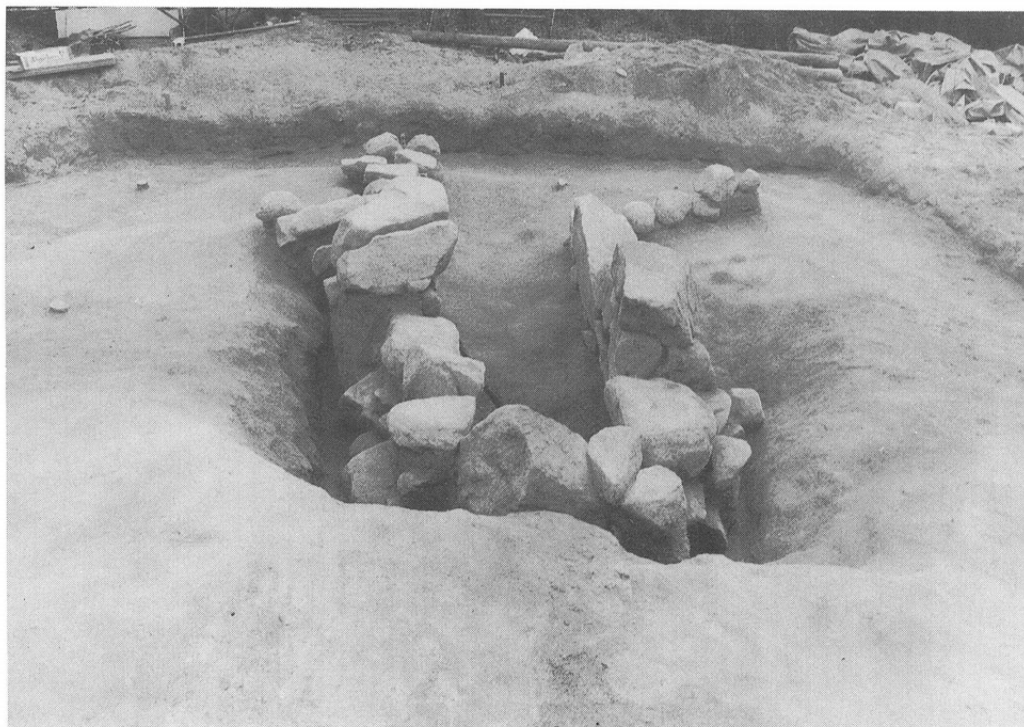


2. 西側石列の状況（南東から）

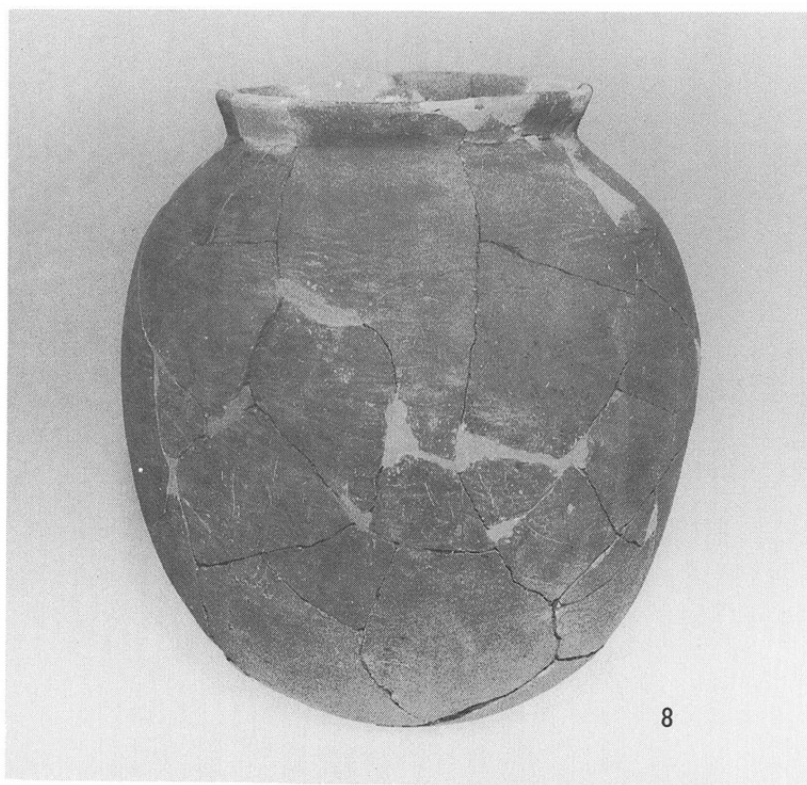
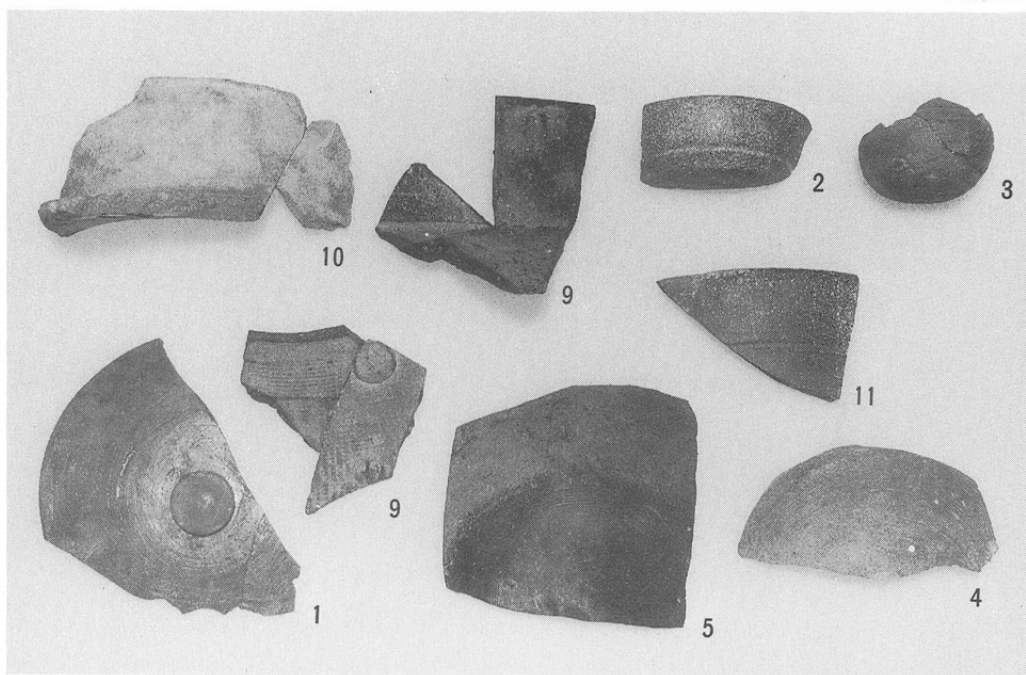
図版 8



1. 調査終了後（南から）



2. 同 上（北から）



出土遺物

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第3集

溝池北古墳

平成3年3月31日 印刷発行

編集・発行 倉敷市教育委員会
岡山県倉敷市西中新田640番地

印刷 二華園印刷
